

Title	<図書紹介>「ジーニアス和英辞典」第2版
Author(s)	濱嶋, 聡
Citation	大阪大学言語文化学. 2004, 13, p. 189-193
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77937
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編集主幹 小西友七・南出康世『ジーニアス和英辞典』第2版、大修館書店、2003年12月10日発行、1998項、3,300円＋税。ISBN-469-04165-3

高校や大学の英語教員の間で「生徒は辞書を引かない」「学生にもっと辞書を引かせるにはどうしたらいいか」といったことがしばしば話題になる。しかしここで言っている辞書は例外なく英和辞典のことである。和英辞典を引かないと嘆く教員はいたとしてもごくまれであろう。ライティングの教科書を編集する際、苦勞することの一つは、どうして和英辞典を引かせないで英文を書く練習問題を作るかということである。なるべく多くのヒントを与えて辞書を引かなくてすむように工夫する。これには、もちろん答えのバリエーションを少なくして採点の便を図るねらいもあるであろう。しかしもっと大きな理由は、和英辞典に対する不信感である。いいかえれば和英辞典の英語の用例に対する不信感である。古くさい英語、やたらにくださった英語、特定の文脈があつて初めて意味をなすひとひねりした英語、日本人編集者や執筆者が創作した変な英語、そして標準的な正しい英語が、ごちゃ混ぜに入っているからである。ネイティブスピーカーがチェックするようになって、かなり事態は好転した。しかし外部発注的なチェックには限度がある。用例のチェックだけ頼まれたネイティブスピーカーは、古くさい英語も、やたらにくださった英語も、ひとひねりした英語も英語は英語であるから、これをOKしてしまう。また、依頼主である日本人編集者に対する遠慮もあるであろう。日本人が創作した不自然な英語も、よほどひどい英語でない限り不合格にはならないのである。

最近になってネイティブスピーカーが単なる英文校閲から脱して編集陣に加わって、スタートから辞書作りに参加することで、事態は一気に好転した。編集している辞書の立場からネイティブスピーカーが英語を判断する態勢が整ってきたからである。和英辞典は「日本語を母語にする人」と「英語を母語にする人」が共同して創るものという当たり前のことがようやく当たり前になってきたのである。『ジーニアス和英辞典』も、コアを構成する重要語については、日本人と英語のネイティブスピーカーがペアを組み、英語日本語の双方の観点から意見を出し合つて執筆し、コロケーションと同一文内におけるシノニムの交換性 (interchangeability) を○×△で明らかにするという斬新な企画を取り入れることによって新しい和英辞典として生まれ変わった (実際には無印が○)。以下いくつか第2版の特徴を列挙する。

(1)世界の辞書学史上で初めて典型 (typical)・非典型 (non-typical) の中間を示す△を採用した。語法辞典などで△を採用した例はあるが、本格的な英和・和英辞典では初め

ての試みである。

これまでの日本の英語教育は○か×であった。要するに「正しい」か「正しくない」のいずれかの基準で英語を判断していたのである。しかし現実の英語世界はそうではなく、○×で割り切れない「ぬかるみの」世界なのである。特にコロケーションがそうである。例を挙げて説明してみると、「日本の教育組織を調査する」は make a survey of the Japanese educational system であろうか、それとも do a survey of the Japanese educational system であろうか。ネイティブスピーカーは do をよしとする。しかし BNC (1 億語英語コーパス) で調べてみると、do [does/did] a survey 21, make [made] a survey 11 で do が典型的であるが、make も可能であることがわかるため、do [△ make] a survey と表示した。do [make] research の場合はどうであろうか。この場合もネイティブスピーカーは do をよしとする。BNC で検索しても do [does/did] research 56、make [made] research 5 であるため、research の場合は、do [×make] research という表示を採用した。

このように多くの場合コロケーションに絶対不可は存在しない。あるのは、典型的 (○)・非典型的 (×)・その中間 (△) の区別である。このように○×でわり切れない世界を○×で割り切るのは現実を逃避したやり方である。○×の固定観念で縛られた英語教育に警鐘を鳴らす意味で、『ジーニアス和英辞典』第2版はあえて△を採用した。△は「頼りない」、「無責任だ」、「user-unfriendly」と考える人がいるかもしれないが、○△×の世界を○×で2分化する方が「無責任」で'user-unfriendly' といえよう。△の採用は真の意味で user-friendly なのである。

(2) 同一文内におけるシノニムの交換性 (interchangeability) を明示した。

「起こる」のシノニムには、happen, occur, break out, take place, come up などがある。[その事故は私が着く前に起こった]を英語に直すとしたらこれらシノニムのいずれが適切なのであろうか。

The accident [] before I arrived.

happened はいいだろうということはわかるが、生徒は happened を使ってくれるとは限らない。このような場合従来の和英辞典ではお手上げである。本辞典では次のように示されている。

The accident happened [occurred/took place/△ broke out/△ came up] before I arrived.

ここでは省くが、語義解説にどうして△、×なのかという理由がわかるように工夫を凝らした。しかし注意して頂きたいのは、コロケーションの神秘性である。なぜそうなのか説明できない場合が多いのである。「楽しいバカンスを!」は Have a good [happy/pleasant/nice] vacation! で「楽しい」のシノニムはすべてOKである（もちろんどの語を普段使うかという個人の好みはある）。一方「パーティーは楽しかった」は、I had a good [△ happy/pleasant/nice] time at the party. のような結果を得た（BNC もほぼ同じ方向を示している）。この相違は神秘的であり、「慣用原則」(idiom principle) という以外説明がつかない。これを砕いて説明すれば、have a good time は固定化したコロケーションなので、他の形容詞が入り込む余地がほとんどないということになる。コロケーションをここまで追求した和英辞典も本辞典が最初である。英作文の授業にきつと威力を発揮するであろう。

(3) 机上で作りに上げた語法解説・用例でなくネイティブスピーカーの直観を反映した語法解説・用例を提示した。

これまでの一般的傾向として日本人編集者は、英語のネイティブスピーカーよりも、英英辞典とりわけ英語を母語としない外国人学習者向けの辞典 (EFL/ESL 辞典) を頼りにしてきた。克明に EFL/ESL 辞典を引くことはいいことである。しかしそれがマイナスの結果を生む場合も少なくない。たとえば、climb を EFL/ESL 辞典で引くと、go up or ascend, esp. by using the hands and feet or feet only: to climb up a ladder. とある。これから推論すると、climb up a ladder は完璧なコロケーションである。「ケーブルカーで山に上る」はどうであろうか。この場合はもちろん足も使わないので、climb a mountain by cable car は語義から類推すると不可となる。しかしネイティブスピーカーの反応を調べてみると、climb a mountain by cable car は日本人が考えるほど抵抗のある表現でないことがわかる。おそらくネイティブスピーカーの頭には” go up or ascend, esp. by using the hands and feet or feet only” のうちの go up or ascend の「上がる」の部分が鮮明に記憶されていて by cable car との結合にそれほど抵抗を感じないのであろう。事実 The sun climbed the sky のような「手足を使って」とは無関係な用法が climb にたくさんある。もう一例あげてみると、empty を EFL/ESL 辞典で引くと、” with no people and things inside” と定義されている。これだと、an empty room は OK だが、an empty seat はおかしいということになる。seat と inside という概念は合わないからである。しかし、an empty seat はごく普通の表現である。おそらくネイティブスピーカーの頭には” with no people” の部分がより鮮明に記憶されていて inside の方が

希薄になっているのであろう。いうまでもないことであるが、発信のための英語は、日本人が机上で作上げた英語よりもネイティブスピーカーの直観を反映した英語であるべきである。

(4) EFL/ESL 辞典から修正借用することによって生じた不自然な英語を排除した。

日本人中心で和英辞典を作るとなると、必然的に用例を EFL/ESL 辞典にたよる度合いが大きくなる。しかし著作権の問題があるので、そのまま借りることはせず、修正借用ということになる。その際最も安易な方法は代名詞の取り替えである。

(1) He saved me by giving me some money.

(2) I saved him by giving him some money.

(1) (2) とも代名詞が入れ替わっているだけで文法面では問題はない。しかし (2) がオリジナルであるということはある得ない。ネイティブスピーカーは (2) に不満を示す。理由はおわかりだろうか。save は目の危機から命を救うというのが基本的な意味で英文の意味は「お金を与えることによって (お金に困って自殺を考えていた) 彼の命を救ってやった」である。「私」を主語にすると「私は彼の命の恩人である」というすごく恩着せがましい内容になるのである。いっぽう、(1) は「お金を与えることによって (お金に困って自殺を考えていた) 私の命を救ってくれた」である。「彼は私の命の恩人である」という感謝表現になるのである。文脈もなにも与えられない和英辞書、発信を目的とした和英辞書の用例としてどちらがふさわしいかは自明であろう。なお、I helped him by giving him some money. であれば、単なる金銭的援助をいっているだけなので、用例として問題ないだろう。

(5) 動詞はしばしば 2 つの型を持つが、型が異なれば伝える意味が異なるのが原則なので安易にイコールで結ぶことをさけた。

多くの日本人にとって、(1) (2) はイコールである。

(1) I gave him a book.

(2) I gave a book to him,

しかしネイティブスピーカーは (2) に抵抗を示す。文末焦点という言葉が示すように、英語では通例文末に来る語は大きな情報を担い強勢を受ける。(1) では 'book' (2) では 'him'

に焦点がある。代名詞はすでに知られている人・ものを指す。それゆえ情報量は少なく強勢は受けない。それ故'him'に焦点が当たるのはおかしいのである。「彼女でなく彼にあげた」というふうに「彼に」を強調する文脈であれば、(2)でもおかしくないという反論が出されるかもしれない。反論としては正しい。しかしその場合は、I gave a book to him, not her.のようになり、もっと普通には、「誰に」が問題になっている時はI gave a book to Bill, not Maryのように名前をいうのが普通である。いずれにせよ「私は彼に本をあげた」の英語訳はI gave him a book.なのである。

(6) おかしな英語を排除し標準的な英語に修正した。中にはOEDなど大きな辞書にでているものもある。しかしOEDにでていうことと、現在発信に安心して使えるというものは全くの別問題である。訂正は数百カ所にのぼるが、数例のみあげておく。

「私は湖畔に立って琵琶湖を眺めた」I stood on the shore searching Lake Biwa. → I stood on the shore overlooking Lake Biwa. (search Lake Biwa は「琵琶湖を探索する」)

「スピードを出して走っている車はものすごい土ぼこりをたてた」The speeding car raised quite a dust. → The speeding car raised a crowd of dust behind it. (dust は不可算名詞)

「あなたがここに留まることが望ましい」It is more desirable for you to stay here. (シェークスピア劇の台詞のよう。訂正のしようがないので、「困難を軽減するよう努力することが望ましい」It is desirable to devote efforts to easing these difficulties. の例に変更。フォーマルな語にはフォーマルな用例というのが和英・英和を問わず辞典の用例の原則である)。

このように『ジーニアス和英辞典』は和英辞典の原典に戻る一方で、斬新かつ有用な工夫を凝らし、新しい和英辞典をして生まれ変わった。(本辞書まえがき要約)

(濱嶋 聡)